

2022年9月18日 佐土原キリスト教会 礼拝説教

聖書箇所：マルコ福音書 11章 1～11節

説教題：私を守られる王

以前、NHKの番組で、東日本大震災時の福島第一原発の事故の様子がドラマ化され、再現されていました。番組を見て分かったことがあります。当時、現場では、人間が制御出来ないことが起こっていたのです。2号機でしたか、3号機でしたか、原子炉—(核燃料本体を納めている容器)—の圧力を抜くことが出来ずに、その容器が大爆発を起こすところだったようです。それが爆発したら、とんでもない放射能が大気中にまき散らされ、東日本には人が住めない、しかももう人間の手には負えない、現場の人にはどうすることも出来なかったそうです。しかし、そんな危機的な状況の中で、容器は爆発しなかったのです。人間の力を越えたところで、自然に圧力が抜けたのです。私は「神が日本を守って下さった」と思いました。神は生きておられ、この国をも見守り、働いて下さっている、そんなことを改めて思ったことでした。神は、この世を治めておられる方なのです。この方こそ、私達が上に戴くべき方ではないでしょうか。

さてこの箇所は、「イエス様がエルサレムに入城されたこと」を記す箇所です。それは人々の歓声に包まれた華やかな入城でした。しかし、それは同時に、十字架を5日後に控えた「受難週」の始まりを意味する入城でもありました。今朝は「イエス様のエルサレム入城」の記事から学びます。

ガリラヤからエルサレムに向かって旅をしてこられたイエス様は、オリーブ山の手前の「ベタニヤとベテパゲ」に近づかれました。オリーブ山を越えればもうエルサレム、距離にして2～3kmの所です。その時、2人の弟子をベタニヤからベテパゲに向かって「ロバの子を連れて来るように」と遣いに出されます。その際、「もし、『なぜそんなことをするのか。』と言う人があったら、『主がお入用なのです。すぐに、またここに送り返されます』と言いなさい」(2～3)と教えて遣いに出されました。そして弟子達が行ってみると、お言葉通りにロバの子がいて、連れて行こうとして咎められた時にも、イエスの言われた言葉を言うと、彼らは連れて行くことを許してくれます。

この部分について「ロバの持ち主はイエスの弟子になっていた人で、イエスは、この日のために、前もってロバの持ち主と約束を交わしておられたのだろう」と言う人もいます。そうかも知れませんが、やはりイエス様が超自然的な方法でこの場面を造り出された、と考えるのも良いのではないのでしょうか。いずれにしても、「マルコ福音書」が強調しているのは、「イエス様が『主がお入用なのです』と言われた」ということです。なぜなら「マルコ福音書」において、イエス様をご自分のことを「主」と呼んでおられるのはここだけです。つまりこの「主が…」と言う言葉には、イエス様のメッセージが込められているのです。では「主がお入用なのです」とは、どういう意味でしょうか。

それは、ロバの持ち主に対して「あなたの主があなたのロバを必要としている」ということではないのでしょうか。つまりイエス様は、ロバの持ち主に対して「主(王)」になろうとしておられるのです。そして、それを弟子達がそのまま伝えたところ、持ち主はすんなり許してくれた。それはつまり「イエス様が『主(王)』になろうとしておられる」そのことを、神が背後から支え、それが成るように配慮しておられるということです。同じことが次の部分からも言えます。イエス様はエルサレムに入城されるのにロバの子を用いられました。なぜロバの子だったのでしょうか。そこにイエス様のメッセージがあるのです。イスラエルの人々が読みついて来た預言の書—(ゼカリヤ書9章9節)—に次のような言葉があります。「シオンの娘よ。大いに喜び。エルサレムの娘よ。喜び叫べ。見よ。あなたの王があなたのところに来られる。この方は正しい方で、救いを賜わり、柔和で、ろばに乗られる。それも、雌ろばの子の子ろばに」

(ゼカリヤ 9:9)。「やがてやって来る『救い主(王)』は、ロバの子に乗ってエルサレムにやって来る(入城する)」と預言されていたのです。そして、イエスがその通りのことをされたということは、イエスが「私こそ預言された救い主(王)である」と主張しておられるということです。「ゼカリヤ書 14 章」にはまた「その日、主の足は、エルサレムの東に面するオリーブ山の上に立つ」(ゼカリヤ 14:4)という言葉もあります。イエス様が、オリーブ山に近づいた時に行動を起こされたのも、この預言の言葉を意識されてのことだと思います。

イエスはロバの子に乗られました。するとイエス様の進まれる前に、人々が上着を脱いで敷き、棕櫚の枝を敷きました。イスラエルでは、それは王を迎える時にすることです。また人々は「ホサナ。祝福あれ。主の御名によって来られる方に…」(9)と叫びました。これは「詩篇 118 編」の引用ですが、「ホサナ」というのは、「主よ、救って下さい」、あるいは「王よ、救って下さい」という言葉です。ですからここでも、自らを「救い主(王)」として主張しておられるイエス様に対して、イエス様が「そうしなさい」と言われたわけではないのに、人々はイエス様を「王」として扱っているのです。神の配慮がそうさせているのです。

つまりこの出来事は、イエスがご自分を「私が王である」と主張され、そのことを「よし」とするかのごとく、神の配慮がそれを包んでいる。「父なる神」と「子なる神」がイニシアチブを取って、「イエスは王である」と主張しておられる、そのような出来事なのです。イエスは、ここで初めて、自ら「王」になおろうとしておられる。神様はイエス様を「王」として宣言しようとしておられるのです。その意味でこの個所は、私達に『『王になろうとされた』イエス様のそのメッセージを受け取るように、イエス様を『王』として、1人1人が、お迎えするように』と語っているのです。

しかし私達の心は、「イエスが『王』になろうとしておられる」と聞くと、何かしらの抵抗を感じるのではないかと思います。「王」というと支配するイメージがあります。私達の中では、イエス様は飽くまでも謙遜な方で、柔和な方で、謙った方で、私達に仕えて下さる方です。

「王」として私達を支配なさる方ではない。だから私達のイメージと合わない。同時に私達の抵抗は、「イエス様を『王』として迎える」ということ自体の中にあります。CS ルイスは、次のように言います。「サタンが我々の遠い祖先の頭に注ぎ込んだ考えは、人間は『神のようになれる』—自分を造ったのは自分自身であるかのように一本立ちでやって行ける—自分が自分の主人であって、他の何者にも仕える必要はない—神から離れたところで、神とは係りなく、自分の力で何らかの幸福を作り出すことができる—という考えであった」(CS ルイス)。私達は、自分が自分の「王」でありたいのです。誰かに支配される、誰かが自分の「王」になる、それを本能的に嫌うのです。自由が侵害されるような、窮屈なような、そのような思いを持つのです。だから私達は、「イエス様を信じる」と言いながら、また「王なる主イエスよ」と歌いながら、一体どれだけイエス様を、自分の心に、自分の生活の場に、自分の人生に、「王」として、「従うべき方」として、迎えているのでしょうか。

しかし、なぜイエス様を「王」としななければならないのでしょうか。ただ「信じる」というだけではいけないのでしょうか。以前、青年会で見た「アルファ・コース」の中で講師のニッキー・ガンベル先生が、サッカーの例を使って素晴らしいことを教えていました。先生がある日、成り行きで「子供のサッカーの試合」の審判をすることになりました。先生は、審判の仕方を知りません。でも、取り敢えず試合を始めてしまったのです。周りの白線もない、どこを走っても良い、何をしても笛は鳴らない。自由です。でも、子供達の試合は、楽しいどころか、けが人は出るは、滅茶苦茶になってしまったのです。やがて、時間を間違えていた本物の審判がやって来ました。彼は白線を引き、きちんとルールを課しました。そうしたら子供達は、のびのびと試合を楽しむことが出来たのです。従うものが出て来た時、子供達の自由が奪われた

のではない。却って力を発揮し、思う存分自分のプレーを楽しむことが出来たのです。私達の人生の縮図と言えないでしょうか。人は、何も従うものがないのが自由なのではないのだと思います。従うに値するものを持って、それに従う時、私達は本当の自由を手に入れるのではないのでしょうか。思い切り生きる自由、良く生きる自由です。

それだけではありません。イエス様は「私が王である」と、「あなたの王である」と言われます。その方は、何のためにエルサレムに入城されるのでしょうか。十字架に架かるためです。その、十字架に架かるため、エルサレムに入城するための一切の備えをしておられるのは、イエス様です。父なる神様です。ロバもそうです。さらにその前の10章32節にこうあります。「さて、一行は、エルサレムに上る途中にあった。イエスは先頭に立って歩いて行かれた」(10:32)。イエス様が黙々とエルサレムに向かわれるのです。十字架の救いに関わる一切のことは、イエス様が、神様がして下さる。人間には出来ないからです。しかもこの後、イエス様は、私達のために、私達にいのちを与えるために、重い十字架を負って、ローマ兵に鞭打たれながら、何度も何度も倒れながら、ヨロヨロと歩いて下さった主です。そして、私達にいのちを与えるために、十字架の上で最後まで苦しみ抜いて下さった主です。そうでなければ、私達の罪が赦され、神の御手の中に入って生きる希望、永遠のいのちを生きる希望はなかったのです。それほどに私達を愛して下さったのです。

その方が、死から甦って、「私はあなたの王である」と言って下さっているのです。そのイエス様を王とする時、本当に私達がそのことを信じるなら、この世の中は、私の人生は、決して、「もうどうにもならない」というところまで、「もうお終いだ」というところまで、悪くなることはない、という希望を持つことが出来るのではないのでしょうか。私達にどんなに辛いことがあっても、どんなに苦しいことがあっても、先に希望が見えないようなことがあっても、私達の人生を支配しているのは、私ではない、誰か人の力でもない、運命でさえもない、私達を愛するが故に十字架を負って下さった神様が、イエス様が、私達の王として私を支配して下さっているのです。この話は前にも紹介しましたが、ある場所である姉妹に2~3年ぶりにお会いしました。その姉妹は、私を見つけるとすぐ、「この神様は本物ですよ。祈りには力がありますよ」と言われました。その方のお嬢さんは、学生の時、不登校になられたのです。当時、その方が信仰していた宗教の上の人からは「これはあなたの娘さんの運命だから治らない」と言われました。そんな時、ある方に紹介されてキリスト教会に行くようになります。「そこから運命が変えられた」と言われるのです。「娘の運命も変えられた。家族の運命も変えられた。キリスト教に出会っていなければ、今頃、娘はどうなっていたのか、家族はどうなっていたのか。それを思うと、主に感謝をしている。本当に主は運命さえも変えることがお出来になる素晴らしい方です」。そうであるなら、私達がイエス様を「王」とする時、私達は絶望しなくて良いのではないのでしょうか。私達は、「王」なる「イエス様から来る希望に支えられて生きることが出来るのではないのでしょうか。だからこそ、私達は、この個所を通して、イエス様を「王」として受け入れ、イエス様を「王」として生きようとするのです。

では、イエス様を「王」とするとは、具体的にどうすることでしょうか。「1ペテロ書」に「あなたがたを試みるためにあなたがたの間に燃えさかる火の試練を、何か思いがけないことが起こったかのように驚き怪しむことなく、むしろ、キリストの苦しみにあずかれるのですから、喜んでいなさい」(1ペテロ4:12~13)とあります。4年前にこの教会来て下さった福島の佐藤彰先生は、原発事故の直後、この御言葉をとり上げてこう語っておられます。「今の状況は正直に言えば苦しみです。でもここに『試練を喜べ』と書いてある。だから、確かに本音の部分では苦しいけど、でも信仰を働かせて喜ぶ方を選びとって行きましょう。主が喜べる状況を与えて下さいます」(佐藤彰)。イエス様を「王」として迎えるとは、主に信頼し、自分の本音を

裏切るようにしてでも、主の言葉に生きようとするのではないのでしょうか。私達の霊的な祖先であるアナバプテストのクリスチャン達が迫害で苦しんでいた時、彼らを励ました御言葉があります。「ですから、私たちは勇気を失いません…今の時の軽い患難は、私たちのうちに働いて、測り知れない、重い永遠の栄光をもたらすからです」(2 コリント 4:16~17)。彼らは、本音を裏切るようにして、この御言葉に生きたのです。イエス様は「仕えることの大切さ」を教えた後で「あなたがたがこれらのことを知っているのなら、それを行なう時に、あなたがたは祝福されるのです」(ヨハネ 13:17)と言われました。しかし、イエス様を「王」として迎える思いがなければ、私達は主の言葉を聞いても、結局、聞き流すことになるのではないのでしょうか。そして結局、自分の人間的な思いを大切に、それに従って行こうとするのではないのでしょうか。それは、自分を「神」(「王」)として生きることです。そこには祝福はないのです。だからこそ私達は、イエス様を「王」とするのです。そこにこそ、祝福の道があるのです。

ここで人々は、自分達の上着を差し出しました。全ては、イエス様が備えて下さったことでした。しかしその中で、人々がしたことは、イエス様を心から「王」としてお迎えして、上着を差し出すことだったのです。それをイエス様は、喜ばれたのです。私達が、差し出すことの出来る上着とは何でしょうか。私達の救いも、全部、イエス様が、神様が、備えて下さいました。私達は、何もしていません。そのような中で私達が出来るとは…。それは、申しあげたように、私達が御言葉に生きること、そして、私達の生き方を、少しでも御心に適うように変えて行くことではないのでしょうか。それは、まず自分を「王」として生きること止めて、イエス様を、本当に「私の王」として心にお迎えすることです。

イエス様は「主がお入り用なのです—『あなたの主があなたを必要としておられる』」(3)と言って、ロバの子を用いて下さいました。ロバは、イスラエルでは、神殿に捧げることの出来ない、ある意味で、御心に適わない動物だと言われたのです。その子ロバを、しかしイエス様は尊く用いて下さったのです。私達のような者が差し出す上着も、イエス様は、きっと尊く用いて下さるに違いありません。私達をより良く生かして下さいるに違いありません。私達は、今日改めて、イエス様を「私の『王』」としてお迎えしましょう。